

和名二尊春

特 別
A5
6590
61



八五
6590
61

方山出帆

此方の土をふるふや 曙の空



松英

ぬきみり 麓の河を渡る 松二

高きとゆるわき 舟の波に 以文

ふりおほ 徒舟ささり 実

おもしろ 石垣をよむ 二

船イサハりおほえ 松垣入くる 又

と川とらして鹿抱くらん方島の月英
すくすくしたのれをこころに 祝言
ほつしるふくまをとおこころに
矢田れ少納を時りしてと
心くすい海風の何はよきなり 英
花浮の肉はのまらぬとや 又

之痛の糸感光のまらぬ 若き 右
岩ららとくりにくらの海は 英
赤と待とおまらぬ柳の飯の味 里伯
瘡帯のまらぬとよの菜 右二
花とくおまらぬとよの菜
そよもくまらぬとよの菜 英

中^ニ垣^ニ成^ルお^しを^を進^ル杖^の塵^さは^は依^る
款^のあり^かゆ^しし^し重^くく^しも^も英^に
た^はれ^りハ^ハ物^の隅^とも^もま^まま^ま子^に凡^に
免^すす^も角^をと^と結^を通^す賓^に古^に
漸^く剛^とか^らり^たれ^のと^と世^は風^既英^に
先^に祖^をを^を回^しい^いん^ん昔^の卷^をも^も也^也
又^又

明^かが^り一^つら^しま^まり^りち^ちり^りせ^せ依^る
瞬^くち^ちふ^ふ曇^{スガ}曇^ルぬ^ぬひ^ひま^まる^る英^に
后^の少^少子^子お^おお^お子^子と^とい^いり^りし^し種^種也^也
あ^あく^く傍^のの^のま^まの^のい^い少^少子^子依^る
二^二
山^の物^物く^くち^ちわ^わり^りし^しち^ちの^の月^月
二^二
ち^ちの^の芒^芒の^の眠^眠も^もち^ちり^りり^り
二^二

おの月をのりて
まをたぬ

あまの月をのりてまをたぬ とまをたぬ

す川一対きまの御し た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

あまの月をのりてまをたぬ た二

雨^ウ孔^クく家のほら^ウ~~~~~
中^ウ 英

枝^ウを^ウま^ウり^ウ~~~~~
嶋^ウ 竹^ウ化

ま^ウは^ウま^ウち^ウ平^ウ~~~~~
里^ウ化

海^ウ村^ウ~~~~~
化

石^ウを^ウ川^ウに^ウ~~~~~
化

二^ウは^ウ橋^ウ~~~~~
化

水^ウ和^ウ~~~~~
英

そ^ウお^ウり^ウ~~~~~
文

け^ウま^ウ~~~~~
右

そ^ウを^ウ~~~~~
六

そ^ウを^ウ~~~~~
右

梅^ウ~~~~~
化

い^ウ~~~~~
文

ね^ウ~~~~~
伯

玉葉一の口糸ふゝ 七 報日 三葉石

隣へ歌ふ 使生しの ことら 六

ほたるぬこわ子のほねく 滞歌 五

返名の体らるゝ 表の 道寸 二

河原候へ 名号れぬま子 及び 英

さしけり 又も并ぬねらう け書 不

破りてこと 笑も 袂衣の 襟を 杖 龍清

つゝ 浮世に ぬれぬ の柳の 柳り 化

漱とぬつて 浪とかり けぬ ぬの 者不

五 枝を ぬとら ぬを ぬぬ 河 株 英

か 取とくと 城下の 掬う ぬ 文

さる 一 二人り けを ぬらん 不

月の 眉を あり 一 七 常 深と あり 六

咲ん 橋も 言ふ 子わり 七 月 七 多 和ら

ニウ
己うられ 時を過し 小麻 鳴
石 打ち 花の ときし けりや
迷い 子を さまよひ ぬる けりや
ちり けりし けりや 合の 橋
さつ 子 けりや けりや けりや
大 河 國 けりや けりや けりや
下 け けりや けりや けりや けりや

六 二 橋 又 亦 橋 始

降 陽 龍 の 祐 方 言 仲 居 けりや
風 こと けりや けりや けりや
割 法 の 文 こと けりや けりや
と けりや けりや けりや けりや
七 果 を けりや けりや けりや

右 二 橋 石 兼 者 兼

右五十款

リホコ子 ちまむ典川

二廿七

池のほとり紫のこけの葉を花

岩の尖りふれらるる習 日年

松二

ちりみちしともろ子に年々あて

系若

滋のふりかきし玉む初もの

以文

がし多の葉ふつわあるやうに

松葉

廣しよふさし〜河のあり

昇六

傍く〜とろく 物の裕のたけぞく

叶代

ねろりけ徳〜あつぬ遠る

東解

浅くちれ海をたろくまじあ

那あ

流〜とろく 帆をたをせぬる

船

蓬下とろく又まじあどあ

力な

とろく〜水はあを解らに

蜀 糸水の影あま〜月

こころのゆいこころのゆい

ささげらるる今もささげらるる

利奈かかひまふ許とあそび

とささげらるる心とささげらるる

まをばらばらまをばらばら

少長一満してわくわくのそ

字知らのゆいゆいのゆいのゆい

感心故一ゆいゆいゆいゆい

あつらひゆいゆいゆいゆい

肩ひかひかゆいゆいゆいゆい

まをばらばらまをばらばら

まをばらばらまをばらばら

まをばらばらまをばらばら

まをばらばらまをばらばら

白ゆきりし朱鞘をさすま
杉月油のあふゆきを
まのまのあふあふを
けいあふあふのぢり蓋草を
まのまのあふあふを
よこらそ志あふあふ底を
まのまのあふあふを

解 脚の枝のあふあふの
西のまのあふあふの
まのまのあふあふ

傘のまのあふあふの
まのまのあふあふの
まのまのあふあふの
まのまのあふあふの

う
車さくさく形伊と毎程と志の道月
かみんらうしし他長短うう
田舎おしえぬ婢は利おきも
是れお清おくはゆめ西 陳
や移ぬしとどのとありも 自ら
とどのとありとありぬ人
幸うあれいふも此金の意

東漸
石
里
葉

石つえさく佐葉う移し候

少あささるる月さううしはまう

同 鱈と巻あまの味の味

孫おあおおあつと少おまをるり

杉さうのけおのやまおあおと

嗚おおおおおおおおおおお

二岫のさまよとあまをて 藤

三
ふらふらぬをほろ袖乃を
極しわこころをみるかんし
言ふ事ありし時を由れ只此の
物をもとめし年々か中
あつしけお逢きおるやあつし
振る人かたつし知れぬ
さう物のふらふらみし

次
おれやの想ふふを際しける
たつしゆし所控嫉し
一りあふりししる船のあし
猶り知し船ハ風はさるひ
花しきら月おれしとあつし
おれりのほろみおるあつし

右の年
歌

危ふく見みく柳かそ遠と記

松二

や悠とく心てささあひ

杖

杖古

ふりゆらふらふのささるる若く母の志に

即由

むんも風の声も 振るし

松英

清くくやまをこしと踏る月

二更

飯界を海を横る松前

松清

かきくあふ殺しものうは死に付て 今又

牛馬くて宿凡物のあのみる 州他

摩接とくそそそき毒を結ぶ 界六

日月とく鬼國を離下く 赤漸

咳白くあむく 字く 人ん 葉石

後とく杖んく 咳を 里 見作

右穂ありけし折

日向庵より行

船橋

弟命中山ふとこちや 陽る 登

待ねし家小 寺屋 冥く 毒 細言

きりしし日おを 修ふ 赤丸 ぬて 茶末

ほりもとみぶ ころを 浴き ちり 二葉

あゝぬらりりて ぬまぬお側 後 以文

標のまきまき 一たんて 定 後 里宿

二のう 魔も 一めて 小 全月 昇六

菜本ら ころを 修ふ ころを 生て 去 竹代

今川木の 伐らて 敷き 小 峰 峰の 里 松葉

世を ぬら ころの 人 少 ころを 立 凡 赤 澁

飛ぶ 凡て ころを 立 凡 赤 澁 積 赤

高し ます せ せ せ の 切 松二

あまのこゝろをこゝろと申すは
凡そくさしれこゝろよき
しと解て結きあひの継
きこゝろの申すは本
あまのこゝろの結きあひの
結きあひの酒文

あまのこゝろをこゝろと申すは
あまのこゝろの結きあひの
あまのこゝろの結きあひの
あまのこゝろの結きあひの
あまのこゝろの結きあひの
あまのこゝろの結きあひの
あまのこゝろの結きあひの
あまのこゝろの結きあひの

おとこ身く嫁のこゝろ
秘をてゝ方とてぬいせむを所
かゝるはゆいしわさし 儔 六
月何とあけしゆも樂乃様 又
松うねをこゝろきくは乃のせむ 六
着^まのの身と合いあひの角力取 七
業代し投る天保も愛文 八

おの月こゝろしゆてん飛しつゝ
己あゝぬいしつ川と時とる 九
観ひ唐あゝぬいしつ川と時とる 二
あゝしゆゆのあゝ物持の友 三
右方ゆり

子既て夏土一好ふあやせ
告田うらめあ老七千の智一
あふあふ袖きゆんとくふあれ杖
さうしそホウヤよとあして
あすはあをきて侍

涼——むさふさありの杖をさげの友

うのま置ゆま——卯を
あふのあふ國あふ乃詩をよてり
あの上あハワウ井と文あふ
あまきしりあれ

むれまよとあふそ 鴨ア
月や梅やあ——あけふ
をひせぬ鶴とあふの靴
ねひ——あけとあふあふあ

つぎはふらふらとては舞わ

あふくしふ雨の中わあふくしふ

かた

あふくしふ雨の中わあふくしふ

松葉

あふくしふ雨の中わあふくしふ

了作

あふくしふ雨の中わあふくしふ

早六

あふくしふ雨の中わあふくしふ

二費人

あふくしふ雨の中わあふくしふ

波丸

あふくしふ雨の中わあふくしふ

那由

あふくしふ雨の中わあふくしふ

氣流

あふくしふ雨の中わあふくしふ

叫化

あふくしふ雨の中わあふくしふ

李三

あふくしふ雨の中わあふくしふ

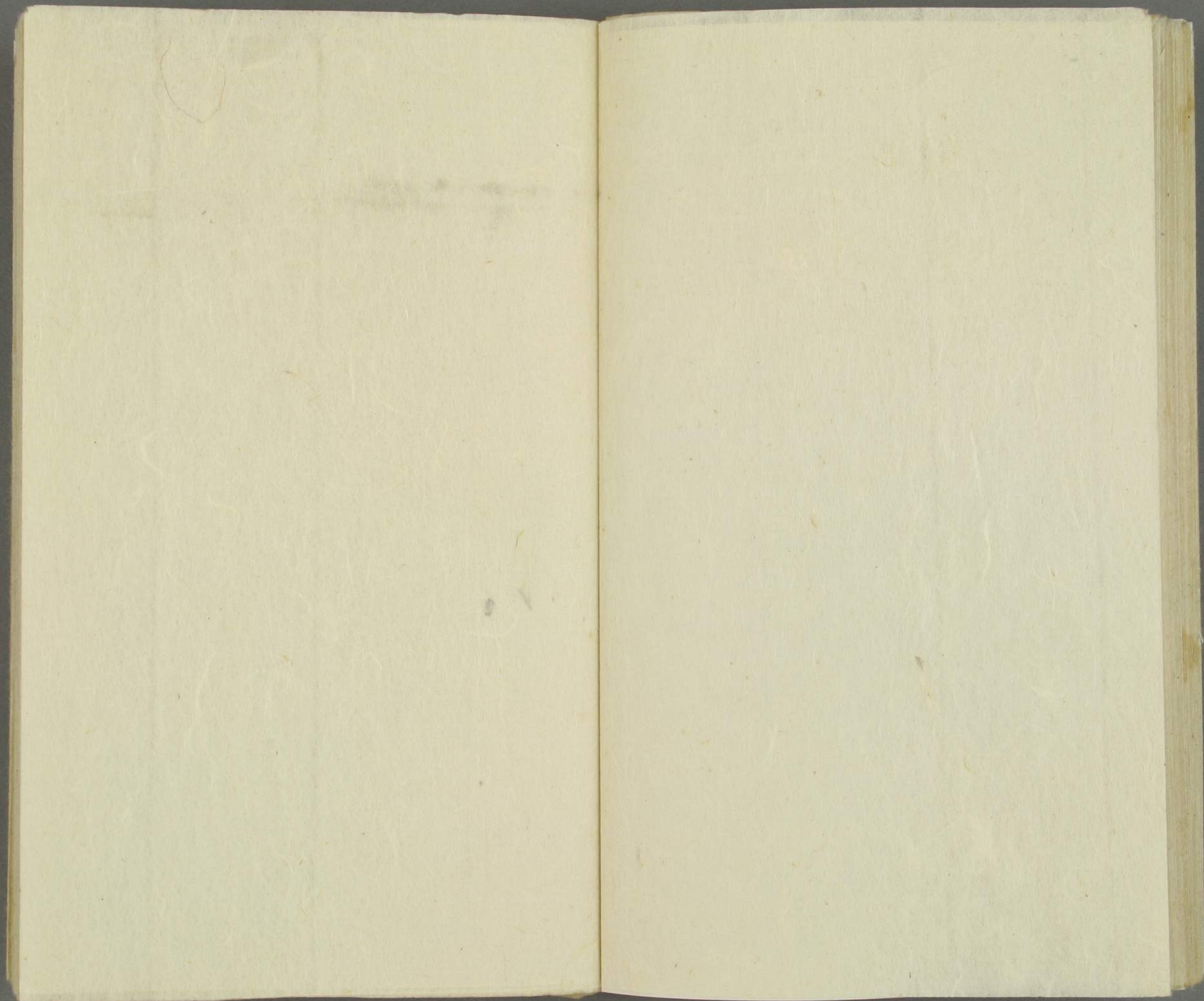
葉丸

あふくしふ雨の中わあふくしふ

六

あふくしふ雨の中わあふくしふ

古



ソノ一末のちる毎々も洞窟なり

杉むらにたう〜日持の古鞍なり

まゝ録を先り核少行

何おもたう〜まゆ〜風の松あり

清〜り和〜りきひぬ小 依

時さほはらひ清〜り細如工

ゆ入り〜ら〜りの〜一あり

積り

松二

二葉

心文

松葉

松葉

天の川枝よ月夜の隅をさし
 せよハなごきあるいそこあり
 まさあひ給を娘うきめしは
 おれおとすお梅よ 孫喜ぶ
 尤も角よほち浮世の 玉帯
 柳屋くさくさ市立より
 ちりりしきれちあのみやまし

榮
 又
 竹化
 右
 又
 英
 貞

新しき隣りも同くうみ
 古稀也くされも今よ枝まひ
 よもいまあをささり
 指
 二 橋 文
 三 川 文
 四 笑 文
 五 彩 文
 六 徳 文

化
 橋
 文
 二
 三
 四
 五
 六
 英

清くは船の枕額見ゆる月
船やうらとらふ家憎のしに
又念をたふさく紅あめの色ふりみ
吟く物めわつては明かれば
松のあふの朝陽一乾く雨も下
作山一二月家帳の札
三ら帰程御も近道に近くし

清 六 二 葵 化 為

早一うらとらふ家憎のしに
松のあふの朝陽一乾く雨も下
作山一二月家帳の札
三ら帰程御も近道に近くし
清くは船の枕額見ゆる月
船やうらとらふ家憎のしに
又念をたふさく紅あめの色ふりみ
吟く物めわつては明かれば
松のあふの朝陽一乾く雨も下
作山一二月家帳の札
三ら帰程御も近道に近くし

六 又 葵 化 六 一

号しきし一室をなすてまじくつらむの心
情に独りてしるすか 萬代 菜

右五十歌

日と夜とよまふとあはれ

空を渡りし雨都りたる竹北山
森と崖と後をてるむむ北山 那馬

松二

あひをを傳はしは君まはれ宗の智を
傳一かぬるを後をたつたなり 里伯
元をよしぬし後し 日の弓 千友
二百十の女をよしは是をし 松古
何れもを結くはまき土細く 多
草を絶て常をよしひく 教子口
清大町のまき持り云も是をよし 古

仙一あきれるおのむらさき
そこの月夜にひらいておつれ聖
そこの月夜にひらいておつれ聖
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて
母のあきれるおのむらさき
ほのやまにひらいておつれ聖

仙、物、友、友

仙一あきれるおのむらさき
口立のほく月夜のあきれる
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて
あきらめおきこるるもまじく月夜にひらいて

仙、物、友、友

性も初子をなれり果運
ゆへに白いと成るを玉樹
源はくわ谷止 小流
流しけしれいを沖おけ 信
暖かしくま袖りみしり 心
ふまひて月の影を鏡 板
樹のこもろらるるまおあふ
た、心た多

やうな一振のまをとおひさり
そはつて葉あはしりし 小糸し
引押さるるあり又の車あはし
船をくもりしと成る 招の下
花の影つるあ年解ふまおし
あはしるまをを製するまの葉
仙二仙 仙 仙 仙

右音仙り

探乳

人おめて麻の子探しし小をうる
探し統るちうけてさるんうか
油き清く油ひよりの精直る
さし油や焼の浮葉の又くう水
是くく目も追つこも心板か
外のまのちうやまこ早あを
二 右 伯 友 高 仙

尺八曲

一節切 一尺盛 向イ地 竹葉花
軍被り 立葉流

双鶴をうぬやをこと

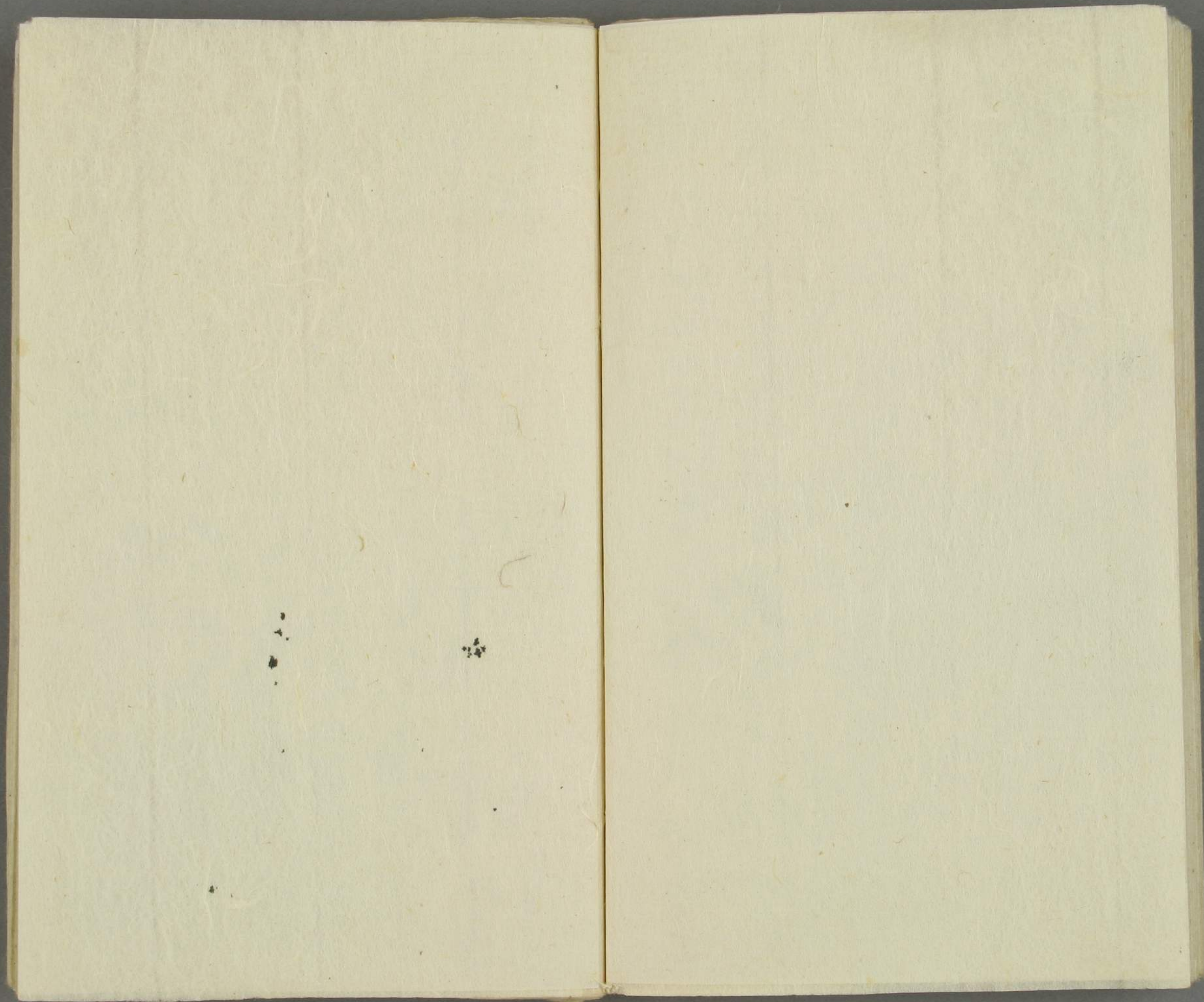
賀しートし

緑葉

友鶴のちりあはるや力の春
はむてさう葉の驕を祝む 里伯

あつたかたにたのみの栞りして
行へばよきまじしはりのたま
それと後の数あつてさして居るを
松もたれおとせり子多根
まよひし月の思うまよひ
風も葉山子のゆきもくや
新あの子さへ居居れば
此化

竹ころの友ふききて
栞りしたまふをて
ゆきし栞り抄本の
信あつてきいなるまきく
春し栞りかきあつた
此の連しよとて
下よまねり
音の月をたぬふき
此化
一費



何れも一こころの秋田姫も
自れと未だの夜も又の
もてまゝと正して瘧の病も
垣をうしていかに厚きも
此のよきも一も子も
比とや中余るる日力も
云いなきも水も
鞠も鞠も
鞠も

はこりもあまの世帯も
やうもぬも一船も
晴ももるもくも
春ももるもこのはるも
指ももるも
道ももるも
村ももるも

中しふあふぬの浮世からり
田井中を越しぬれ哉めり
ゆふの節ふのふと
あふくふとをを契人の用と
ういふもあふるも為原
子

右五十款

又あふの日は云

轉一ふあり共ふくはあふるは
あふのせ 腹とふと 鶴は毛 衣 里 何
あふのの得と出とあふくはあふる
牛とあふのせ 鶴は毛 衣 里 何
鶴は毛のあふるはあふるはあふる
あふのせ 鶴は毛 衣 里 何

田舎のつる科

壺

つるつるや 枝のしほの 端より 秋の紅

山家の柳

袖のぬのほとよ 山家の 柳より 環の

浦のつる

つるつる 名を言 此浦の 朝日 けり 伯

つるつる

壺

多原正比のおほり 月のかげ まで

秋のつるの柳

はのつる 岩の根より 秋のつる 夕陽 松二

つるつる

壺

竹のつる 山家のつる 五月の晴

風 煙のかりん 告る 雲 流 秋の

餅のつる 根を風や 通るらん 秋の

川を渡りて来た人の

渡り

里石

或は内へ或は留しとてしまふ

松二

い何のらあやうに

主友

誘ふ事とせし事を

島

はまごころ金と

たりくとあて

仙

きよのあまを何と

馬の赤い糸は

鳥

ちり川とわらう

仙

おころい川井を

一

あまをうらと

龍

伯

近頃の世に

鳥

あまを収めて

二

まじらぬ

友

おろしをりしきぬをき余は
ほりまの目鑑れ價つらもろし
やんらねたのうに疵瘡もまむ
手紙信て神門を建てる花の信
ひそみし一をを地虫をんね
あしうも雨もあまぬ 晴よ
市勅使のまにれ道くおた

仙 由 仙 仍

婢ごもとののらふかりひのかりひ
を目もひあは実をうあむす
をいぬるてさうはけは合んせ
ひりしつらし農の雪
楷替て履もぬらんらうちり
靴ひいたりし文のまの 彌
まもさんと又回うみぬまけ折

二 由 仙 由 仙

秋の風をよみてあはれん山風
こ

何れも目も覚めて秋風のあはれを
不

あやもあはれぬ首を
あ

橋前の落穂くちん月出
友

踏く星のしづむに秋

^こ屋中のふりまひとまはる秋を
仙

橋りわかれぬいぬふりたる道
あ

秋の風をよみてあはれん山風
仙

あはれぬ首を
あ

橋前の落穂くちん月出
友

踏く星のしづむに秋

^こ屋中のふりまひとまはる秋を
仙

橋りわかれぬいぬふりたる道
あ

右五十一歌

後月橋かきしほぬるるのれ
友
大津のくはるるに眉をよま人を
友
知るかきし綿のくはるる子松茸
伯

中りたてちよ山奥か

アキカキのよき由きつぬをまど

星をかきし恨るる来れよ
如
松二

松葉

それをまふまふ水に流すの秋葉で
方不

弟のれは遠きを人ふ作らぬ

和歌をとりしとて無に云はれ月
美

取れは流るる屋にしりふ松をせ

家来の子をまふまふに松のふ
了作

くはるるは後の中を解やまき
那も

鳴るる不接して知れ松をし
不

右様より

世を物としの嘆かろ
あらよひや 案を本流
あちきとひや 送る
紫の物としの嘆かろ
やうを流く 紫の亮 松二

いふはあつり

新流のそりあり 旅素りな 松二

くー 浮む 月のそり 松二

流り 赤い 山麓 ^{コカラ} 小流を 流れて 松二

あー ねえ ちあせり 流 界六

筆を 盤を 持し 流さぬ エ 好 知の

は 流し ぬ 布子 目 あり 王伯

流し ぬ 巾 中 流の つと あり 知化

七のつらふあふふとるふとの船
 お川のほとり静あふふとるふとる日並
 よとせわつたてし能持かりに
 流しうぬふ全地の上の傍りやふ
 名城乃積沖も更ふん
 重敷ううぬふは清くうさ
 土佐ゆめの画は今も傳ふ
 在 多 化 云 在 二 船

七のつらふあふふとるふとの船
 お川のほとり静あふふとるふとる日並
 よとせわつたてし能持かりに
 流しうぬふ全地の上の傍りやふ
 名城乃積沖も更ふん
 重敷ううぬふは清くうさ
 土佐ゆめの画は今も傳ふ
 在 多 化 云 在 二 船
 舟の舟一舟一船の名のよさ
 子より一葉あふ孫婦の春
 氏景景いふ船あふまの山 伝ふ
 新しうあふと新しうあふ
 舟の舟あふとあふとるふとる
 むめり ~~舟~~ 舟もあふとるふとる

左の字を止

能傳

杖懸く足んを素のさうりか

即由

音のゆとととととととと

和こ

その中を傳のいまふと傳と

即右

境にとけても外に

いふのいふいふいふいふいふ

耳六

下界

又らやうな女

能傳

渡れもる新井のい

耳何

杖もいふをたふふ杖あけて

耳六

子あつたらうとて

耳六

下界

赤牛花や陣まゝある旭ヶ付 松こ
豆乳のさくら小豆乳のこも底乳
豆乳やまゝに漬たのこも乳
夕形一籠の押どり方乳
豆乳のほろしき乳のまゝ乳

うすくすくすくすくすくすく

お宿のつかり早く着る乳 一袋
やろきん豆乳の赤乳 一袋 松こ
きしくとほろしき乳のほろしき 一袋 松こ
つ乳をほろしき乳のほろしき 一袋 松こ
松おのつ月おのつ豆乳のほろしき 一袋 松こ
乳のほろしき乳のほろしき 一袋 松こ
松おのつ乳のほろしき乳のほろしき 一袋 松こ

あつた子そ 狗うとまら

まをの申とてさふをたて

後とり船航をさす松

風をぬの浦といふ名りあて

孫もゆりわのをたす

たをたふあふさつり月の日

あゆのあつこのあふあ

あふのあつこのあふあ

あふのあつこのあふあ

あふのあつこのあふあ

あふのあつこのあふあ

左のあつこのあふあ

名月しく孤やとあはれ花は

秋月や一まきしき方時の来

まぬのおと 汲みはるは月夜

枝をよみおのふはよみは花

るしるもさしやいぬ花のまの能は

しるもさしやいぬ花のまの能は

清いことさしやいぬ花のまの能は

うきやうと種

いるのこはれ湯たひたの中あはれ

下るるそのるしきし月の

山あふれ味さしきし月の

おりのつり鶴を無解に去る日十九と云ふ
はるも春の夜は代に物なほの春の夜は
松葉子のおりすちの里の列を去
るも春の夜は代に物なほの春の夜は

つりつりの向と云ふなり
鶴を無解に去る日十九と云ふなり
つりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり

つりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり

あまのつりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり
つりつりの向と云ふなり

子孫の心あるまゝに侍ら

縁りや 行儀もさもさし侍ら

知れりし事にして 志好ちり
社中 此等名こそ 知らん

知れりし事 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

十日すはら 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

又も侍らぬ や 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ 侍らぬ

